



住民ディレクター
25年史プロジェクト

住民ディレクター追走25年史!! 凡人力の群像



プロローグ prologue

住民ディレクターは「身近な日々の出来事を受発信しながら、交流、行動すること」で暮らしを豊かにしようとする人たちのことです。私はテレビ局時代に五年半かけて熊本県の九十八市町村を二周半歩き、日々の何気ない生活現場にとっても大事なことが山ほど隠れていることを「番組づくりを通して」発見していきました。

私自身は技術が苦手で、大きなカメラや機材、多人数でしかできない番組の制作現場に不満を感じていました。一方で「使い方次第ではテレビというこんなに便利な生活道具はない」との確信も深まっていました。そこで技術にこだわらず、地域の人達と共同で番組づくりを行い、地域の課題や魅力を探り、発見した宝物を放送する「未来創造メディア」を構想、実践しました。技術は大事、でも「仏つくつて魂入れず」では未来は描けない!!

実は二十五年前にすでに「スマホのようなもの」の登場を予感していました。その時

代になれば、老若男女、あらゆる分野、業種の境なくこの住民ディレクターの手法で誰でも家族や地域の皆さんと豊かな暮らしを創造する環境ができる。さらに地域貢献、社会貢献に繋がり、世界中の皆さんとのネットワークを紡ぐ新しい仕事をはじめ「起業家」の登場を想像しました。

この本の著者である古川柳子さんを中心に、ご協力いただいた全国の住民ディレクターのみなさんは多種多様な立場で活動されていて、今回のように必要な時にはあつという間に集まるONEチームの「プラットフォーム」になっています。自分より周りの方々の発信をする控えめな方々が多く、だからこそ成り立つ信頼のネットワークです。このような活動に心が響く「まだ見ぬ人々との出会い」をこの本に期待しています。

ご支援いただいたみなさま、心よりありがとうございます。

住民ディレクター創始者 岸本晃

番組はオマケ

「番組づくり」は色々な人達がワンチームになる不思議ワールド

身体がカメラ

カメラや技術より
地域を歩く
あなたが主役

地域を創る!!

ひとり一人の
企画力・発信力が
地域づくりの宝もの



目次 Contents

プロローグ

第1章	「花咲か一座」がやってきた……	4
-----	-----------------	---

ことのはじまり

第2章	お百姓さんが“使えるTV”……	10
-----	-----------------	----

「住民ディレクター」誕生

第3章	国体を支えた住民パワー……	16
-----	---------------	----

「くまもと未来国体」の躍動

第4章	住民ディレクター新世紀……	24
-----	---------------	----

「テレビは見るもんじゃなか、
出るもんばい」

第5章	IT時代の「ユビキタス村TV」……	32
-----	-------------------	----

ローカルとグローバルを繋ぐ

第6章	住民ディレクターの全国ネットワーク……	40
-----	---------------------	----

「養成講座」で全国行脚

第7章	東峰村のIT革命……	48
-----	------------	----

村民による村民のためのテレビ局誕生

第8章	官兵衛で国創り……	56
-----	-----------	----

過疎村落が全国ネットのハブになる

第9章	被災者による被災地からのモバイル中継……	66
-----	----------------------	----

熊本地震発生の日日常の中で

第10章	復興のコミュニティ……	76
------	-------------	----

九州北部豪雨水害を超えて

エピローグ

〈資料編〉

- 住民ディレクター年表
- 参考資料

お百姓さんが“使える”TV“

『住民のためのメディア』ってなに？

—『情報の発信』ということがよくいわれています。

でも、誰が、何のために情報を発信しなければならぬのでしょうか？
自分たちの暮らしがより豊かになるために、『発信すべき情報』があるのではないのでしょうか。

そのためには、住民が何をすれば精神的にも物質的にも

より豊かになり、どのようなメディアを使っていけばいいのかを
考えなければなりません。

『住民のためのメディア』とは

『住民自身がメディアを使える力をつけること』だと

私は考えます—

これは一九九五年に熊本県民テレビを退社した岸本晃が、「まち創り応援団ぷりずむ」を立ち上げた時のパンフレットに書いた言葉です。当時の岸本の想いが凝縮されていますが、この時はまだどこにも「住民ディレクター」という言葉は使われていませんでした。

「住民ディレクター」の誕生

テレビ局をやめて間もないある日のこと、岸本晃は山江村の内山慶治の自宅で、当時話題になり始めていた「ビデオジャーナリスト」の話をして

いました。小型のビデオカメラ一つを武器に、大きなメディア企業には属さず個人で取材活動をする映像ジャーナリストが生まれていたのです。その地域行政版はできないかと言う岸本に、内山はそのアイデアをそのまま行政でやるのは難しいが、市町村の役場には撮影されたまま放置されているビデオ映像が沢山あるので、ビデオ編集講座をやってはどうかと提案してきました。

住民一人一人が発信力を持つことが最終的には大切だと考えていた岸本ですが、このことを理解できる人材が行政の中にも不可欠だと感じていました。もし内山のように住民の活動を陰に陽にリードやサポートをする行政マンがいなければ、山江村で住民たちが番組制作に参画していく流れはできなかつたでしょう。住民と行政の壁をぶち壊し、風通しがよくなるだけで地域創りは大きく動く…岸本は山江村での内山との出会いでそれを目の当たりにしていました。

山江村での体験を拡げていく舞台として内山が提案したのは、人吉球磨広域行政組合でした。これは山江村を含む十四市町村（現在は一市四町五村）が連携し、道路建設や消防ごみ処理などの生活環境を市町村間で協力して整備するために作られた行政組合ですが、一九九〇年代に入り、文化・観光などにも力を入れ始めていました。

内山はこの組合の企画課にいる高校時代の同級生、永井雄二に相談するにあたり、行政にわかりやすいようにと岸本が書いた企画書のたたき台に「映像制作実践講座」とタイトルをつけました。しかし、最終的に岸本がつけたタイトルは「住民ディレクター養成講座」になっていました。

「わたしはテレビ局を辞めてから、自宅を事務所にして実にいろいろな企画書を書いていて、その頃から畳一畳分のホワイトボードに毎日のように絵を描いて考えていたので、内山さんが書き直したのを見て『ここに住民ディレクター！』と感じたのかもしれない」

(岸本晃)

岸本がそれまでずっと頭の中で考えていた構想が「住民ディレクター」という言葉となって外に出た瞬間でした。

人吉球磨広域行政組合の永井は、岸本の「住民ディレクター講座」の提案を聞くまで、映像を素人が制作できるという発想すらなかったそうです。それまで地域の行政で映像を撮る場合は、すべてプロにお任せでした。でも、行政職員が映像を撮るようになるのはとても望ましいことなので、ぜひその講座を組合主催でやろうということになります。十四市町村全部から一人ずつの職員が受講し三年間続ければ、人吉球磨地域に四十二人の住民ディレクターが誕生し、その人たちが一般住民へのサポートをすることもできるだろうと、最初から三カ年計画で取り組むことになりました。

一九九六年五月、初めての「住民ディレクター養成講座」で、岸本が最初に受講生たちに伝えたことは、今でも続く住民ディレクター三原則、「押せば映る」「身体がカメラ」「番組はオマケ」でした。つまり、映像を撮ることを難しく考える必要はなく、カメラの赤いボタンを押せば映る。撮りたいものには体ごと近づいていこう。番組を作ることが目的ではなく、地域を発見し人と交流するプロセスが大事なのであって、番組は結果としてついてくる、ということです。

講座のテーマは「わが村わが町自慢」。初日からみんなでカメラをもって地元を歩き、地域を改めて見直し、そこに住む人々の話を聞くことからはじまりました。十四市町村の職員それぞれが自分の地域から話題を探し、企画を立て、取材に行つて話を聞き、編集をする……という一連の映

像制作を、三カ月かけて実践的に体験しました。こうして、その後各地で開かれることになる「住民ディレクター養成講座」の原形は、人吉球磨地域で生まれていったのです。

講習会の最後に開かれた受講生たちの作品発表会では、里のソバ道場、伝統工芸の職人、子守歌の里、村のデートスポット等々……各市町村のユニークな地域作品が揃いました。

「住民ディレクター養成講座」のきっかけを作り、自身も人吉球磨地域の住民ディレクター活動の中心的存在になっていく永井は、カメラを通して地域を見直すことの新鮮さを語っています。

「カメラのファインダーをのぞくと今まで見てきたものが違って見えるし、さらにそれを編集し、再生するとまた違うように見えてきます。映像にすることによって発見がありました。それぞれの地域の文化や人を紹介するものが多かった中で、人吉球磨全体の中で知らないこともたくさんあったし、地域を見直し、モノの再発見ができました」(永井雄二)



住民ディレクター
● 熊本県人吉市/人吉球磨広域行政組合 (p30)
住民自らの企画、編集のもと、住民自らがビデオカメラを持ち手作り番組を制作、情報化の推進、人材育成を図ろうと広域のまちづくり

① 人吉球磨住民ディレクター「地域創り2004年1月号」より

ーT時代の「ユビキタス村TV」

東京からのラブコール

二〇〇〇年前後は日本のメディア環境の大きな節目でもありました。IT革命などという言葉が流布するなか、メディアのデジタル化やインターネット普及が本格的に進んでいます。

二〇〇二年に丸田一と高橋明子の取材を受けたことをきっかけに、岸本晃はCANフォーラム(Community Area Network)の活動との接点を持つようになります。このころCANフォーラムには地域情報化に関わる研究者や、各地で先進的な取り組みをしている実践者たちが集まり、新たに生まれてきた地域ICT活動の事例を社会に紹介し、デジタル格差の解消やIT領域の人材育成につなげることに力を入れ始めていました。

CANフォーラム会長だった公文俊平が籍を置くGLOCOM大学に招聘された岸本は、東京と熊本を行き来しながら、IT関係者たちとのパイプを作っていくことになりました。

山江村と世界を繋ぐ

”インターネットがあれば、どんな僻地も全国に、世界に繋がれる——”。当時まだ一種の「ITユートピア」的に語られていたことを、岸本と「マロンてれび」の住民ディレクターたちは二〇〇四年三月、山江村で実行します『だんだんく山江村LEEVE』は村外に住む山江村出身者や、山江村と縁がある人々に向けて山江村情報を発信しようというインターネットライブ配信で、三月三日、十日、十七日の三週にわたり週一回三時間、計九時間行われました。

生中継当日は「マロンてれび」や「NPO法人くまもと未来」などの住民ディレクターたち総勢約三十五人が、司会進行、ディレクター、レポーター、カメラマン、音声マン、スイッチャー、タイムキーパーなどを分担。山江村の自然、食、特産品、歴史、文化について、村民たちが出演して山江村役場前に設けられた特設オープンスタジオから発信しました。番組の中では、米国モンタナ州にある山江村事務所も含む各地とのインターネット中継を行い、まさに、山奥の山江村が日本各地、海外との中継で結ばれた瞬間でした。のちに岸本が多用するようになる住民ディレクター全国中継の原点はこの『だんだんく山江村LEEVE』だったといえます。

しかし東京やアメリカと中継をつなげば、当時、回線費用は非常に高額になりますし、技術的なハードルも相当高いものでした。村営インターネット放送局のための回線が村内に引かれていたとはいえ、無謀ともいえるインターネット中継はどのように実現できたのでしょうか？

実はこの背景には、日本の動画配信の先駆的企業であるJストリームが、動画配信インフラや技術的サポートを担うという大きな支援があったのです。キーパーソンとなったのは、当時Jストリームでの動画を活用したイベント協賛広報を担当していた久保田直美でした。岸本と久保田の接点は、久保田が前職の放送文化基金在職時に、村木良彦(故人・メディアプロデューサー)[※]から「九州に住民ディレクターという活動をしている面白い人がいるから会ってみるといい」と言われ、岸本を訪ねたことでした。

その後、映像に関わる新しい技術に関心を持ち、二〇〇一年にJストリームに転職した久保田は、自ら「人吉球磨交流大学」に参加して住民ディレクター体験し、この活動に興味を持つようになりました。

※元TBS・東京メトロポリタンテレビジョン開局時のゼネラルプロデューサーとしてビデオジャーナリスト制度を推進。

ある日、「面白いことを考えたので相談したい」という電話が岸本から久保田にかかってきました。「山江村から国際インターネット中継をやりたい」という構想を聞いた時、久保田は山江村から発信するということに大きな意味を感じたといいます。



①久保田直美さん

Ｊストリームは、一九九七年に設立された日本初の動画配信システムを提供する会社です。黎明期はアーティストのライブ映像配信など、先端的なインターネットを主な対象としていましたが、二〇〇〇年頃から企業のＩＲやプロモーションなどへ領域拡大を進めており、「まず使ってみてもらって、使っているところを見てもらう」ことで裾野を広げていく必要がありました。しかし、そこで課題となったのが、当時の普通の企業は動画コンテンツなど持っていないということでした。映像を撮るのは、テレビ局や映画会社など、プロの領域だと考えられていたのです。さらに放送業界出身だった久保田は、目まぐるしく変化する技術追求が先行するＩＴ業界でコンテンツ制作は未着手に近い状態であったことに驚いたといいます。

「放送のコンテンツの意味合いをネットの世界にも定着していかないと、マーケットも拡がっていかない。Ｊストリーム自体はコンテンツホルダーでなくても、ネットならではのコンテンツを作るとはどのようなことを理解したり、岸本さんの住民ディレクター講座のように自分たちでコンテンツをつくってみることも、発信をサポートするためには必要なんじゃないかなと思っていました。だから、ＩＴ業界とはものすごく距離感があるけど、日常的にコンテンツ制作をして発信をしている山江村の方々との接点というのは、会社にとってもとても刺激的なんじゃないかなと思っただけです」（久保田直美）

「山江村とＩＴ」という当時としては予想外の組み合わせに魅力を感じた久保田は、岸本らの企画を実現するための技術と動画配信インフラを提供する代わりに、山江村の事例をＪストリームも広報に使わせてもらうという条件で会社を説得し、山江村に乗り込んできました。

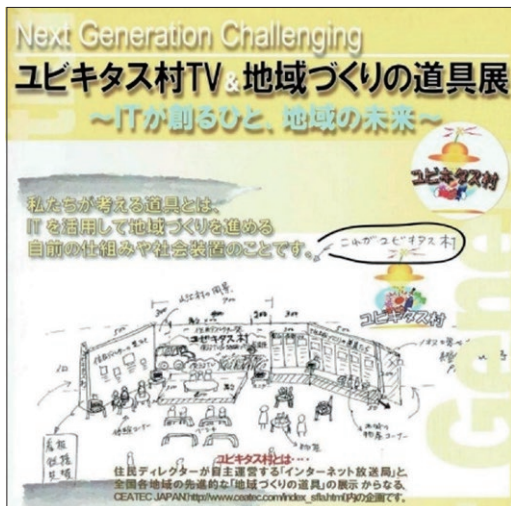
しかし、プロから見れば山江村のネット環境は脆弱だし、村民が持つパソコンのスペックも当然劣ります。通常のビジネスなら回線が切れた時のリスク対策にもお金をかけますが、岸本は多少のリスクは覚悟の上です。物理的な限界の中で、どうしたら実現できるかと、Ｊストリームの技術者と久保田は知恵を絞りました。

本番では、音声がなかなか繋がらないトラブルも発生しましたが、「今、音声復活しました！」など喜ぶ瞬間もそのままＬＩＶＥ送信され、『だんだんなく山江村ＬＩＶＥ』は実現したのです。

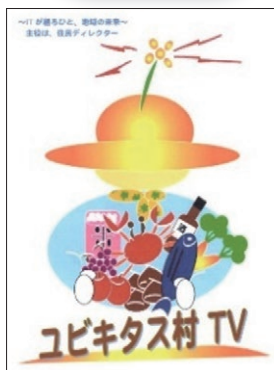


CEATEC JAPAN「ユビキタス村TV」

『だんだんく山江村LIVE』は当時のIT業界でも注目を浴びました。しかし久保田は、住民ディレクターのような息の長い活動が、継続的に心を持ち続けてもらうためには、次の新しい「場」が必要だろうと考えます。そこで思いついたのが幕張メッセで毎年開催される「CEATEC JAPAN」と住民ディレクターのコラボレーションでした。



CEATEC JAPAN
「ユビキタス村・住民ディレクター」パンフレット



CEATECパンフレット
会場イラスト
④[制作:吉村明子]



地域づくりの
道具伝播
MAP



現を支援してくれることになったのです。

岸本は、この機会にCANフォーラムとも連携して、全国の地方発ーIT活動事例を発信する「地域づくりの道具展」を展開しようと企画します。CANフォーラムに集まっていた地域ーIT活動のユニークなリーダーたちに声をかけ、それぞれの活動のパネル発表を展開。その真ん中に仮設スタジオを設け、各々の活動についてインターネット中継「ユビキタス村TV」で発信しようという企画でした。

CEATEC JAPANはアジア最大級といわれるーIT機器見本市で、毎年世界の最先端機器が披露される舞台です。Jストリームはこのイベントを主催する日本エレクトロニクスショー協会の動画配信をサポートをしていました。久保田は『だんだんく山江村LIVE』の事例を話し、住民ディレクターとのコラボレーションを協会に提案しました。協会はその新しい取り組みに理解を示します。話はトントンと進み、岸本と内容を詰めていくなかで、主催者が出展場所の提供のみならず、住民ディレクターらがイベントに集結するための費用なども含め企画実現を支援してくれることになったのです。

官兵衛で國創り

大河ドラマ『軍師官兵衛』追走番組？

「東峰テレビは来年一年、NHK大河ドラマを追走しようと思います」
そんな話を岸本晃から聞かされた東峰村の村長や村民たちは、「え？ どういうこと？」と思わず首をかしげたそうです。

二〇一四年のNHK大河ドラマは『軍師官兵衛』でした。主役の黒田官兵衛は播磨姫路に生まれ、晩年福岡を領地とし、「福岡」という地名の名付け親でもある人物です。元々歴史好きの岸本は、東峰村近辺にも黒田家に由来するモノ・コト・ヒトが多く遺されていることを聞いていたので、「NHK大河ドラマとゆるく連動しながら、地域の歴史を見直し、人と地域をつなぐ番組」を思いついたといいますが、どうしたら大河ドラマを追走して人や地域を繋ぐ番組を作ることができるのでしょうか？ 東峰テレビの村民スタッフたちはあまり歴史に関心はなかったし、地元と「軍師官兵衛」との関係など考えてもいません。そもそも、岸本だって大河ドラマの放送が始まるまで、『軍師官兵衛』の内容がどうなっていくかは知るすべもありませんでした。

番組スタート前に決まっていたのは『官兵衛で國創り』というタイトルと、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』の毎回の全国放送が終わった後、十五分間生放送するというだけ。具体的な内容はほとんど白紙のまま始まったこの番組は、回を重ねるごとに各地の話題が提供され、意外な人々や地域間に、連動が生まれ、一年間追走し終わった最終回には一年の間に番組制作を通して繋がった人々がほぼ全員参加する『官兵衛で國創り』二十六時間テレビで大団円を迎えるという意外な展開をみせていくことになりました。

④「官兵衛で國創り」番組告知チラシ



**住民ディレクター発！
官兵衛で國創り**
～NHK大河ドラマ追走番組～

見るのはここ！

- ◆ 東峰テレビ (11チャンネル)
- ◆ インターネット
- とうほうTV HP <http://www.tohoto.jp/>
- ネット中継 <http://www.ustream.tv/channel/tohoto>
- アーカイブ <https://www.youtube.com/TohoTV11ch>

**毎週大河ドラマ終了後
生配信!!
PM8:45～PM9:00**

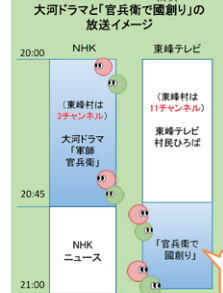
企画主旨

大河ドラマは岡田准一さん(官兵衛)などの有名俳優によって福岡をはじめ全国のゆかりの地の歴史がこれまで以上に身近な存在となります。「官兵衛」を通して郷土を愛する人づくり、人が中心の観光、生涯教育の推進に取り組めます。

企画内容

地域住民の視点で伝える大河ドラマの勝手運的な「住民制作番組」。1年かけて、住民自身が立体的な「地域活性化」の大河ドラマを描いていきます。

大河ドラマと「官兵衛で國創り」の放送イメージ



毎週生放送で広がる全国ネットワーク

毎週15分とはいえ住民が生放送をやり続けることはとても難しいです。「官兵衛で國創り」はNHKの「軍師官兵衛」の放送直後に番組を交えて独自の生放送を準備しています。この一年、東峰村はこのノウハウを伝授しながら全国の「人」と「地域」が繋がる全国ネットワークを築いていきます。「軍師官兵衛」と共に12月に放送を終えると来年からは全国の皆さんとICTを活用して地域活性化を図り、地域課題に共同で取り組んでいくことが次の目標です。

東峰テレビ 総合プロデューサー 岸本 晃

毎日、全国各地から「見守り隊」が出演



見るのはここ！
<http://www.ustream.tv/channel/tohoto>
※ネット配信番組です。

GATVはソーシャルメディアで独自の全国中継展開!

『住民ディレクター発！官兵衛で國創り』

二〇一四年一月五日、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』の第一回放送が終わるのを待ち構えるように、東峰テレビのスタジオでは『住民ディレクター発！官兵衛で國創り』NHK大河ドラマ追走番組が、始まりました。初日の出演はこの番組の司会を務める仲道由美子(歯科医)、梶原京子(農家)と高取七絵(高取焼宗家の奥さん)、利光洋一(元団体職員)らの村民スタッフと岸本。番組の趣旨説明の後、全国五カ所(福岡県朝倉市、福岡県庁、兵庫県佐用町、岩手県陸前高田市、神奈川県横浜市の住民ディレクターとインターネット中継が繋がりました。

東峰テレビのスタジオに村の関係者が集まり、インターネット中継でその日の内容に関係する地域の人々や、「見守り隊」と言われる各地の住民

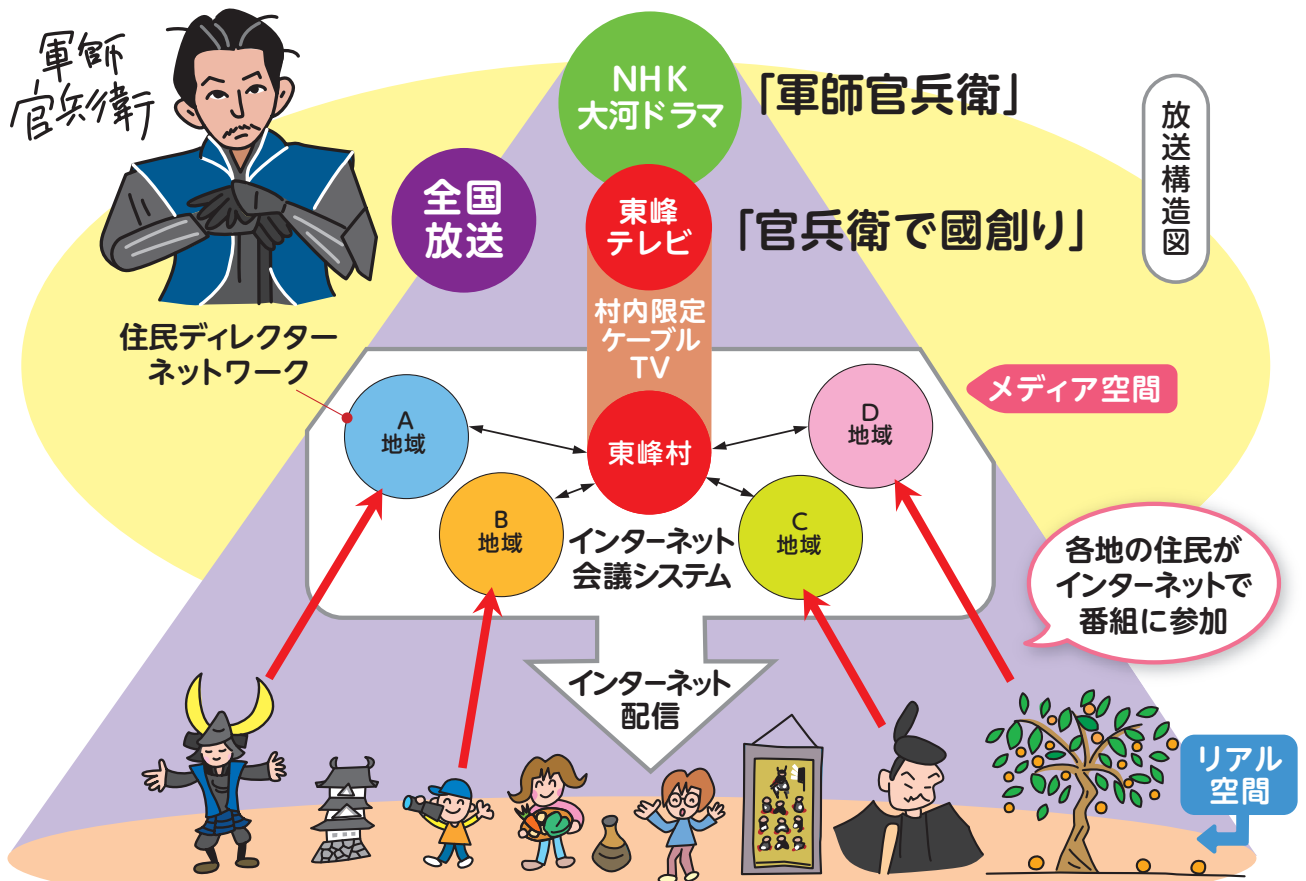
第1回 住民ディレクター発官兵衛とは

ディレクターたちが参加するこのスタイルは、『官兵衛で國創り』の基本形となっていました。



これを実現するために、全国どの地域からでも東峰村の生番組に参加できると同時に、その映像を東峰村限定のケーブルテレビと、全国で観られるUstreamに同時生配信する仕組み作りが必要です。そのために知恵を絞った星有美子や梶原愛理に岸本が求めたのは、技術に長けていない人でも自分で中継に参加できるハードルの低さでした。こうして活用するようになったのがインターネットの会議システムでした。コロナ以降、インターネット会議システムを使ってライブ配信することは珍しくなくなりましたが、住民ディレクターの全国ネット中継はその先駆けだったともいえます。

それにしても、『官兵衛で國創り』とは一体どんな内容だったのでしょうか？NHKの『軍師官兵衛』と東峰テレビの『官兵衛で國創り』の五十本のタイトル一覧を比べると、その傾向の違いが見えてきます。



被災者による

被災地からのモバイル中継

熊本地震発生：

「NPO法人くまもと未来」のメンバー被災

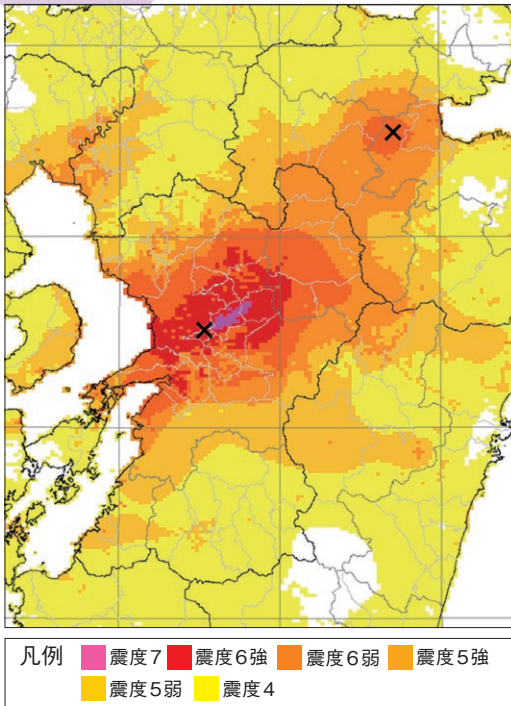
二〇一六年四月十六日(土)午前一時二十五分、マグニチュード七を超える激震が熊本県・大分県西部を襲いました。この震災で被害が最も大きかった益城町に自宅がある岸本晃、熊本市の澤啓子をはじめ、「NPO 法人くまもと未来」の住民ディレクターたちは被災者となってしまいます。

本震が襲った夜が明けた午前八時三十五分、岸本は住民ディレクターたちがインターネット中継番組の連絡用に使っていたフェイスブック・グループスレッドに、熊本市内の避難所、熊本県立第二高校から投稿しました。

推計震度分布図

2016年4月16日1時26分頃の
熊本県熊本地方の地震

〈気象庁HPより〉



※この地震の直後に大分県中部でM5.7(参考値)の地震が発生しているが、その地震の揺れも含まれた震度である。

※「X」は震央位置を示している。

【四月十六日 八時三十五分】

岸本晃：「しばらくここにいます。元気です。大丈夫ですので協力をお願いします。避難所に入りました。熊本の第二高校です。当面ここを拠点に救援行動します。澤さん、もし動いたら合流できるとお互い助かるかもです」

その後、澤啓子から家族と一緒に避難している公園の写真と共に、投稿がアップされました。

【四月十六日 八時五十分】

澤啓子：「岸本さん、わが家は前の公園です。昨夜もテントに泊まりました。公園に車が集まっています」

【四月十六日 九時三十二分】

岸本晃：「みなさんが個人的に感じたり、考え尽くしたことはそのままどうぞ。非常時です、誰がどうではないので自分の力をみなさんに尽くす気持ちだけでやってください。道は開けます」

被災地以外の住民ディレクターたちは、この段階で岸本らの被害状況は全くわかりませんでしたが、投稿の言葉に滲む強い緊張感が事の重大さを感じさせました。当時、全国の住民ディレクターのとりまとめ役割を担っていた高橋明子(東京都在住)は、このグループ・スレッド名を「熊本地震対応」に変更。ここが全国の住民ディレクターやサポーターたちのコミュニケーションの場となっていました。

二台の車で家族と移動中に被災した岸本は、着の身着のまま家族を連れて避難所に入りました。その時手にしていた「メディア」はスマートフォンと自動車のみ。岸本が住民ディレクターたちに真っ先に求めたのはモバイルの通信容量を無制限にする方法を教えてほしいということでした。

この呼びかけに東京、千葉、神奈川、茨城などに住む住民ディレクターたちが、インターネットで調べた情報を次々と上げ、午後十二時四分、岸本から通信容量を無制限に更新できたとの投稿が入ります。

本震発生の日は土曜日で、通常なら午後一時五十分から東峰テレビのレギュラー番組『ふらつと☆Nippon』が放送される日でしたが、もちろん誰も放送できる状態だとは思っていませんでした。しかし、各地から安否を問うメッセージが岸本のスマホにどんどん入ってきました。返信がままならぬなか、岸本は現状を伝えるなら、インターネット中継をしたほうがいいと考えはじめます。

岸本はまず、東峰テレビの二人のスタッフ梶原愛理と川原亜美に東峰村の状況を打診し、揺れはあったけれど仕事の継続に支障がないという返信を受けます。次に澤と高橋に連絡をとり、避難所から岸本と澤がスマホで中継し、高橋がデスクを務める体制でスマートフォン中継することに踏み切りました。

スマホでもYouTubeやUstreamなどを使って映像を一方方向に発信することはできましたが、当時は複数の場所にいる参加者同士が会話したり、ライブ中継に写真や映像を挿入することなどはあまり行われていませんでした。そこで岸本が考えたのは、『官兵衛で國創り』で活用したインターネット会議システム・ハングアウトと、スマホ中継を組み合わせる方法でした。しかしそのためには、チャットルームを立ち上げたり、中継画面をスイッチングする役割が必要です。その役割は東峰テレビの梶原、川原の二人に託されました。彼らにとっても、すでに平時から使っていた方法なので緊急でも対応できるだろうとの判断でした。

スマートフォン中継 構造図

